

# 唯識の「心」について

## 『唯識三十頌』 第一偈、第二偈

- 1 由假説我法 有種種相轉 彼依識所變 此能變唯三  
仮に由りて我法ありと説く 種種の相轉ずること有り  
彼は識が所變に依る 此の能變は唯し三つのみなり

サンスクリット語からの訳文(意識)

「私」と「法」とについての仮に説かれているところのもの、それらは識の変化においてあり、その識には三種がある。

「私＝我」や「法＝存在の規範」についての言説(仮に説かれているもの)は、心(識)の変化によるもの。

## 『成唯識論』第一

我謂主宰、法謂軌持。

私とは「主宰」、法とは「規範となつたもつもの」

その認識の変化には三種類がある。

- 2 謂異熟思量 及了別境識 初阿頼耶識 異熟一切種  
謂わく、異熟と思量 及び了別境との識なり  
初めのは阿頼耶識なり 異熟なり一切種なり

サンスクリット語からの訳文(意識)

(三種の識とは)すなわち、異熟と思慮と及び対象を知らしめるものである。その中の異熟とは阿頼耶識であり、すべての種を持つものである。

## 三種の認識の変化

1 阿頼耶識(異熟) 2 末那識(思量) 3 六識(了別境識)

あらゆるものが「認識の変化」によって構成されるという思想

## 私と法

私とは何か？ 今を生きる命ある私 仏道修行を進める私

法とは？ 修行によって具わる特性 五蘊・十二処・十八界など

これらは言葉によって設定されたもので、全ては心(認識)の変化の中で生じているもの。

## 大乘仏教における言葉の問題

言葉とは何か？…中観や唯識における大きなテーマ

言葉によって捉えられた世界は偽物では？という問題意識がある。これは『中論』以来の問題

不一亦不異 不來亦不出 能說是因緣 善滅諸戲論

我稽首禮佛 諸說中第一

不滅にして不生、不斷にして不常、不一にして不異、不來にして不去、戲論寂滅にして吉祥なる縁起をお説きになった、説法者中の最高の説法者である仏陀に敬礼いたします。(『龍樹『根本中論頌』を読む』p.9)

言葉によって生み出されたものが消え去ることで悟りは実現されるという考えがある。

聖書「創世記」 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。

聖書「ヨハネによる福音書」 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった

言葉…logos → 言葉＝論理

言葉への信頼感と言葉によって世界が創造される様を描いている

仏教は、言葉をひとつの手段と捉えている

「対機説法」

→絶対的な真理ではなく、相手を真理に到達させる手段としての言葉

### 仏教的な言語観

言葉・・・戯論＝言語的多様性

言葉によっては悟りそのものを表すことができないという理解の仕方 唯識はこの言葉の働きを認識の展開として解釈した。

認識する心とは何か？

認識には対象が必要という前提・・・認識とは「私(の心)が〇〇を知る」こと 〇〇に当てはまる対象が必要。

しかし、この構造の中に、すでに「私(の心)」と「〇〇(対象)」という分割がなされている。

ちょっと簡略化して「〇〇(対象)」＝「法」と考えてみよう。

「私」という言葉で表される「わたし」は絶えず変わることなく存在しているのか？ ニカーヤ・阿含的な解釈では「私」は「肉体(色)」「感受(受)」「表象(想)」「意思(行)」「認識(識)」の五つの要素(五蘊)でできたものであり、この諸要素は自分の意思でコントロールできななので、私のものはどこにもなく、それゆえ私もないと考えた。

その無我である「私」を設定するのは、言語の働きに起因するのではというのが大乘仏教的な問いかけ。

「わたし」があるから「私」という言葉があるのではなく、「私」という言葉を使うから「わたし」が設定されてしまうのではと考えている。

例)象の鼻

Elephants have long trunks. (象の鼻(trunk)は長い)。

象は梵語では「hastin(手を持つもの)」

同じものを見て「木の幹(trunk)」や「手」を思い浮かべている

これは言葉によって考え方が制限されているのでは

言葉を用いることで「ものごとのありのまま」を把握できていないのではというのが、大乘仏教の大きな問題意識ということ。

このような言葉の働きが、心(認識)の本質的な機能と考える。

心に具わった何かを知る働きは、常に対象を求めており、その対象を自ら作り出してしまう。あるいは、心そのものが変化する中で「知る主体」と「知られる対象」に分かれてしまうと認識するのが唯識の考え方。

阿頼耶識、末那識も六識と同様は対象を認識している

六識

眼識—眼根—色境

耳識—耳根—声境

鼻識—鼻根—香境

舌識—舌根—味境

身識—身根—触境

意識—意根—法境

六識は六根(六つの感覚器官)を通じて、対象を認識している。

器官の有無はあるが、認識の基本構造はこれと同じであり、認識には基本的に対象がある